
流星のロックマン ～あの後英雄は...～

Mr.ブラック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン ～あの後英雄は…～

【Nコード】

N2163S

【作者名】

Mr.ブラック

【あらすじ】

地球の危機を3度救った、ロックマンこと星河スバル
彼はあの後どうしているのでしょうか…
少々のぞいてみましょう…

始まりの朝（前書き）

はじめまして!!

Mrブラックといいます
なにしろ初めてなので、へたくそですが、
お願いします!!

始まりの朝

『…い、おい！！起きろ！！スバル！！』

「うゝんあと五分…」

『何回目だ！！それ！！起きろ！！』

「う…うゝん…うるさいなあロックは…」

『なんだと！！…まあいい。時計見てみろよ。』

スバルは言われたとおりに時計をみる。

…7時50分

「うつつわあああああ！！！！！！…ちつ遅刻だああああ！！！」

『だから言っただろうが…早くしろ！！』

「な、なんで起こしてくれなかったのさ！！！」

『俺は何度も起こしたろうが！！起きないお前が悪い！！』

もつともだ…スバルはあきらめる。

ピンポン

「うわあああ委員長たち来ちゃったよ…」

「スバル…先に行ってもらうわよ…」

「そうして!!」

10分後…

「行ってきまーす!!」

「行ってらっしゃい。」

「おう、スバル急げよ!」

そして…

「ねえロック電波へん『駄目だ』ま、まだ言い終わってないよ!？」

『電波変換は道具じゃねえ!!ほら、走れ!!』

「うえ〜ん…」

スバルは全力で走る…

始まりの朝（後書き）

やっぱり下手ですね…
すいません…

アドバイス、お願いします!!

転校生…なぜ？（前書き）

第2話目です！！

言い忘れましたが、オリキャラ以外は説明を入れません。

あらかじめご了承ください。

転校生…なぜ？

「はあ…はあ…はあ…ま、間に合った…」

「遅い！遅い！！遅い！！！！始業式から遅刻ギリギリなんて、いい度胸ね！」

「そうだぞ！スバル！！！」

「そうですよ。委員長を怒らせないでくださいよ、スバルくん」

「じゅ、ごめん…」

「まったく…まあいいわ。今日は転校生がくるそうよ！」

「へへ楽しみだね！どんな子が来るんだろう！」

「俺はかわいい女の子がいいぜ！！！」

「もう…ゴン太君は…」

『！？この周波数は…おい！スバ…』

キンコーンカーンコーン

「あ、ごめんロック。チャイムなっちゃったから、またあとでね。」

『お、おい！…まあいいか。だが…まさか…な。』

ガラガラガラ

「よし、みんな席についているな。ではまず、転校生を紹介する。1人ずつ入ってこい。」

「俺からか…。俺は荒瀬^{あらせ} カイだ！！ヨロシクな！！」

カイはとても明るい感じで、いかにもスポーツマンといった感じだ。

「音村^{おとむら} ユメカです。よろしくお願いします。」

男子の半数以上の目が釘付けた。

ユメカは少し大人っぽくて、とてもかわいい。静かそうだがどこか雰囲気が出ている。

「えーっと、響 ミソラです みんなよろしくね！」

「ミソラちゃん!?」「」「」「」「」

全員の声がハモツた。

転校生…なぜ？（後書き）

はい…ベタです…ベタすぎます。

でもこのほうがいいですww。

ちなみにカイの性格は、熱斗みたいな感じですね。

名前の由来は、ワンピースの「新世界」、要は新たな世界みたいな？感じですよ。

ユメカは…すみません！なんとなくです！！ww

ミソラの席は…

「じゃあ3人の席だが…3人に決めてもらおう。」

キラーン、男子の目が光る。

「ミソラちゃん!!俺の隣に!!」

「いや、俺の隣に!!」

「いやいや、俺の!!」

もはや戦場だ…

しかし…ある一つの声で…

「私はスバルくんの隣で!!」

「そうか。星河、いいか？」

「え？あ、はい、いいですよ。」

「よろしくね スバルくん!!」

「あはは…よろしく…」

スバルは殺気を感じた…

その中でもルナの殺気は他とは比べものにならなかった…

『ポロロン よろしくねウォーロック』

『ちっ…面倒なやつが来たぜ…』

これで収まった、と思いきや…第二ラウンド開始。

「くっ…なら！音村さん！！俺の隣に！！」

「なっずるいぞお前！！」

「音村さんそんな奴らより、俺の隣に！！」

しかし…これも…

「私は…カイくんの隣が…」

「へ？お、おう。わかった。」

今度は殺気の矛先がカイに…

「そうか。2人は同じ学校から来たんだっとな。よし、星河の前に
いってくれ。」

「よろしくな！！スバル！！」

「よろしく。スバルくん。」

ちなみにスバルの正体は知られている。

「あ、うん。よろしく2人とも。」

「ミソラちゃんもよろしく（な）」

「うん!!よろしくね!!」

スバルの席は一番後ろの一番右だった。しかし、その右にミソラ…つまりは、スバルがミソラを独占…ということになる。

さてさて…どうなるのか…

ミソラの席は…（後書き）

ベタですね。

すいません。

感想、アドバイス等待着ます！！

ミソラの呼び出し（前書き）

なかなか疲れるものなんですね。

小説を書くのってw w

でもとっても楽しいです！

ミソラの呼び出し

「はぁ…なんか視線がものすごく痛いんだけど…」

（つく…スバルの奴め…）

（俺たちのミソラちゃんを…）

（スバルくん…ただじゃ済まないんだからね！！）

その時…

『おいスバル、メールだ。』

「え？誰から…ミ、ミソラちゃん！？なんで？」

《放課後屋上に来て。話があるの。》

ミソラ

（何だろう…）

そして…放課後…

「スバルくん！！帰るわよ！！！！」

「あ、ごめんみんな。先に行つてて！」

「あ、ちょ…」

ကုန်ကုန်ကုန်ကုန်...

今までとは比べものにならないほどのオーラが：

（スバルくん…委員長が怖すぎます…命の保証はなくなりました…）

(スバル…恨むぞ…)

（ふふっ ミソラちゃんかな？）

(あゝ腹減ったなあ……)

：クラスの皆はこんなことを考えていた。とにかく、怖い。：ゴン
太とツカサは別だが。

屋上

「ごめん。待った？」

「あ、スバルくん！！全然大丈夫だよ」

「じゃあ話つてなに？」

「……そ、それはね……／＼／＼」

（？何だろう…大事な話なのかな…）

「ス、スバルくんって、好きな人はいるの？／／／／／」

「!?!?ま、まあね…//」

「!?!?そ。そうなんだ…//」

(スバルくん好きな人いるのか…でも!)

「話ってこれ?」

「う、ううん//これからが一番重要な話…//」

「…分かった。じゃあ言って?」

「すゝ…わ、私はスバルくんのことが好きです!!私と付き合ってください!!//」

ミレンの呼び出し（後書き）

はい…やっぱなんか下手ですね…

はじめてとはいえ、ひどすぎる…

感想等お願いします!!

スバルの答え

「…ええ！？…ミソラちゃん、本気？僕なんかでいいの？」

「もちろん！スバルくんじゃなきゃいやなの。」

「…僕もミソラちゃんのが好きです！！僕でよければ付き合ってください！！／／／／／」

「やった〜！ありがとうスバルくん！！」

ミソラがスバルに抱きつく。

「ちょ…ミソラちゃん！！／／／／／」

「いいじゃん」

「良くないよ…はあ…じゃあ帰ろうか？」

「あ、うん！帰ろう」

2人は屋上をあとにする。

「あ、そうだミソラちゃん、このことは皆には黙っていてくれない？」

「え〜やだ〜」

「…いやいや、僕が殺されるから。」

「じゃあ私が守ってあげるよ」

「…はあゝ大丈夫かな…」

…玄関には委員長軍団が残っていた…

「え！？委員長、皆！？帰ってなかったの！？」

「あたりまえよ！！さあ説明してもらおうじゃないの？」

「私がスバルくんに告白したんだよ」

「「「！？」」「」」

ルナ、キザマロ、ゴン太は言葉を失う。ツカサとジャックは分かっていたようだ。

「どういふことですか！スバルくん！」

「そうだ！どういふこ「お黙り！！」ひっ！」

「どういふことかしらゝ！？スゝバルくうゝん！？」

「ひっ！…ミ、ミソラちゃん、行くよ！」

「え？っ、うん分かった！」

「「「トランスコード！…」」」

スバルの答え（後書き）

はい…もちろん駄文です…

言い忘れましたが、ヒカルはツカサのウィザードってこと…！

設定は、ゲームでいきます。アニメじゃなくて。

ミソラの家…？（前書き）

遅れてすみません

部活等で忙しかったです

ミソラの家…？

そして、スバルの家の前…

「ふゝ危なかった…明日が…怖い…」

「全くもゝ世界の英雄が聞いてあきれるよ？」

「…ミソラちゃんが悪いんでしょ…」

「てへ そうだった」

ミソラは頭を軽く殴る格好で、舌をだした…

(ドキッ！かわいすぎだよ…)

「っていうか、ミソラちゃん帰らないの？」

「え？聞いてないの？」

「え？って…何を？」

「私、今日からスバルくんの家に住むんだよ」

「…はい？…ミソラちゃん、今なんて？」

「お邪魔しまゝす」

ミソラはスバルを無視して家に入った…

「……ええええええええええ！？本気〜〜〜〜！！？」

「あらスバルおかえりなさい。ミソラちゃん、お邪魔しますじやないでしょ？」

「え?... た、ただいま...」

「はい、おかえりなさい」

「……ありがとうございます……。スバルくんのお母さん……」

「敬語はなしね。あと、スバルくんのお母さんじゃなくて？」

「ありがとう……お母さん……」

「はい、よくできました。これから遠慮しないでね？」

「はい！お願いします！」

「じゃあスバルの部屋にでもいつておいて。」

「はい。行く、スバルくん」

「うん。」

無視されて、少々いじけていたスバルであった。

ミソラの家…？（後書き）

うゝむ…久しぶりでこれか…

ひどすぎです…

もっと国語を勉強しないと…

またも新たな家族

「全く…なんで言ってくれなかったのさ…」

「ごめん知ってるばかり…」

「はあ…まあいいや。これからよろしくね…！」

「うん！よろしく」

『クソー…！これからこんなやつと毎日過ごすのかああああ…！』

『ポロロン それは私のことかしら？』

『ちっ…まあしょうがねえか…』

「それにしてもスバルくんの部屋は宇宙の本がいっぱいだね」

「まあ好きだからね」

「そっか」

ピンポン

「誰だろう？」

「「お邪魔します」」

「あら、遅かったわね。」

「「!?!?カ、カイくん、ユメカちゃん!?!?」」

「おう、スバルか。俺らここに住むことになったんだ。ヨロシクな
」」

「よろしく、スバルくん、ミソラちゃん」

「じゃあ2人は私のことはお母さんと呼んでね。敬語もなしでね。」

「了解だぜ、母さん」

「わかった。よろしくお母さん」

またも新たな家族（後書き）

THE 駄文です… W W

もつと頑張らないと…

理由（前書き）

やっとうぐちをすす...

理由

「っていうか、くるなら一言くらい言つてよ…」

「ワリイワリイ、知ってるかな〜って思つてさ」

「ごめんね。スバルくん」

「まあいいや。でも2人はどうしてうちに？」

「ん？え〜っとな…俺、親いるんだが、いま仕事で外国へ行つててな。それで、大吾さんにここへきていいって言われてな。」

「え？うちの父さん知ってるの？」

「ああそうらしいぜ。親同士、大親友だつてよ。俺らも一回だけ遊んだことあるらしいぜ。」

「へ〜知らなかったよ。」

「ははは、まあ無理もねえさ。2歳のときらしいからな。」

「それなら覚えてないね〜。あ、ユメカちゃんは？」

「うちの親も外国にね。私はあかねさんがきていいっていつてくれで。私のお母さんはあかねさんを1番の親友つていつてたよ。」

「そうなんだ〜。2人ともお父さんとお母さんはどこの国に行つてるの？」

「うちはシャーロにいつてるぜ。2年は帰ってこねえとさ」

「うちはアメリッパだよ。うちも2年くらいかな」

「2人とも大変なんだね…でもこれからは僕も、ミソラちゃんも家族だからね！」

「そうそう よろしく。あ、ユメカちゃんあとでちょっときいてもいい？」

「? いいけど…なに？」

「いいから、いいから。またあとでのお楽しみ」

「・・・?」

「みんな〜ご飯よ〜」

「あ、ご飯だつて。じゃあいこうか」

「ああ、そうだな。」

家族の夕食（前書き）

頑張ります。

家族の夕食

「「「いただきまーす。「「「」

「はい、どうぞ。」

ちなみに、夕飯はハンバーグであった。

「おお！うめえー！」

「本当。おいしいね。」

「すっごくいい。お母さん。」

「ふふったくさん食べなさい。」

そして…

「「「「「ちそうさま。「「「」

「はい、お粗末様」

「あ、お母さん手伝うよ。」

「あ、私も私も！」

「あら、ありがとう。じゃあこれを洗ってね。」

「「はい」「」

「じゃあ僕は展望台に行ってくるね。」

「あ、俺も行っていいか？スバル」

「うん。じゃあいつしよに行こうか。」

『はあ…あそこは退屈なんだよな…』

「行ってきます。」

「「「「いつてらっしゃい」「」」」」

家族の夕食（後書き）

サブタイトルが家族の夕食にしては少なかったですねww
しかもみじけえ…

感想、待ってます。

ユメカの気持ち

「2人ともありがとう。早く終わったわ」

「じゃあ上に行ってるね、お母さん」

「分かったわ。」

…スバルの部屋…

「ねえミソラちゃん、そういえば聞きたいことってなに？」

「あ、そうそう。じゃあ聞いていいかな？」

「うん、いいよ」

「ユメカちゃんとカイくんって、付き合ってるの？」

「／／／な、なに！？いきなり？？／／／」

「いや、気になったから…」

「そ、そんなことないよ！カイくんとは、ただの幼馴染だよー！」

「ふう〜ん？じゃあなんでカイくんの隣に座ったの？」

「そ、それは知り合いがなくて、心細かったから…」

「じゃあ好きでもなんでもないのね？」

「／／／、それは…／／／」

「好きなんでしょ？」

「……………うん。まあ…」

「どんなところが好きなの？」

「そ、それは…うん…」

「挙げたらきりがないとか？」

「うん…でも、しいていうなら、カッコイイし、やさしいし…頼りになるし、強いし…」

「強い？」

「あ、うん。それはまた今度話すね。」

「分かった。とにかく好きなんだよね！」

「うん！-！」

「じゃあ告白しちやいなよ！私も今日成功したばっかだし！」

「え…で、でも…」

「いまから展望台に行けば、まだ間に合うよ！」

「な、なにも今日じゃなくても…」

「いいから、いいから」

「うん…分かった！言ってみる…！」

「じゃあ…おかあさん、ちょっと展望台にいつてくるね」

「はい、わかったわよ」

「じゃあいっつか…！」

「うん…！」

ユメカの気持ち（後書き）

疲れたあ
…

カイの気持ちって…？

∴ 展望台 ∴

「おお……きれいな星空だな」

「でしょ？」

「ああ。手を伸ばせば届きそうだな。」

「ははは。そうだね」

「ヒマだあああああ！！！！！！！！！」

「うるさいなあ。なら、帰ってればいいじゃないか。」

「家にはハープがいるだろう!」

「じゃあ我慢しなよ。」

「ちっ
…しよー
がねーな」

「あ、そういえばカイくん」

ん?

「カイくんって、ユメカちゃんと付き合ってるの？」

「はあ？　なんでだよ」

「いや、なんとなくだけど…」

「ん…いや、別に付き合っちゃねーよ」

「ふうん」

「そっぴやあスバル」

「え？なに？」

「今度、俺と戦ってくれねえか？俺も電波変換できんだよ」

「え？なんで？？」

「へっ世界の英雄と戦ってみてえだろうがよ」

「うん…でも、カイくんのウィザードは？」

「いま、ちよつとWAXAに預けててな」

『いいじゃねーか！！やろうぜ！！！！！！』

「またロックは…でも、分かった！！」

「よし！負けねーからな！！」

「僕だつて！！」

告白（前書き）

本日2話目！！

告白

「おい、あれミソラちゃんとユメカじゃねーか？」

「え？ホントだ」

「おい、スバルくんカイくん」

「どうしたの？ミソラちゃん」

「ユメカちゃんがカイくんに話があるんだって」

「俺に？なんだ？」

「え…えつと…」

「？」

「わ、私は、カイくんのが好きなの…もしよかったら、私と付き合ってください！！」

「ま、マジかよ！？本気か！？」

「もちろん本気だよ！！カイくんは、私じゃだめかな…」

「いや、ダメってこたあねえがよ…なんつーか…うん…」

「あゝもう、カイくん！」

「え？なんだよ、ミソラちゃん」

「あなたはユメカちゃんが好きじゃないの！？」

「…わかんねえ…」

「「え！？わかんない！？」」

「おう…なんつーかさ、ダチ感覚でいたしよ…」

「そ、そうなんだ…ごめんね、カイくん。やっぱりいいよ…」

「でも！俺は何があってもユメカを守りてえって思ってたんだ…これが好きなのは分からねえけど…たぶん好きなんだよな…」

「そつだよ！それが好きって言うんだよ！！」

「そうか…じゃあ俺はユメカが好きだ！俺でよければ、よろしく頼む！」

「カイくん…ありがとう！！」

「よかったね！ユメカちゃん！！」

「うん、ありがとう！ミソラちゃん！！」

「じゃあそろそろ帰る？」

「そつだな、そうすつか」

また新しいカップルが誕生した瞬間だった

告白（後書き）

へタクソです…

長い夜

「じゃあ寝ようか」

「ああ。でもよ、ユメカとミソラちゃん、それに俺はどこに寝りゃあいいんだ？」

「そうだよね…」

「私はスバルちゃんと寝るよ」

「「「!?!?!」」」

「だ、だめだよ！ミソラちゃん！」

「さすがにまずいだろう…」

「私もカイくんと寝たい」

「ユ、ユメカ…お前まで…」

「じゃ、じゃあこうしようよ。ぼくとカイくんで寝るから、ユメカちゃんとミソラちゃんでも寝てよ。」

「そ、そうだな。それが良いと思うぞ。」

「「嫌」」

「そ、即答…」

「どうするよ…スバル…」

「あきらめなさい！スバルくん」

「そうだよ！カイくん！」

（さすがにまずいよ。ファンの人や委員長に知られたら、僕の人
生が終わる…）

（やべえな…まさかユメカがこんなこと言いだすとは…）

「スバルくん…私のこと嫌いなの…？」

「いや、そうじゃないけど…」

「ねえ、カイくんは…？」

「き、嫌いじゃないが…」

「「じゃあいいじゃない」「」

「はあ…あきらめるか…布団ひとつ持ってくるよ…」

「あきらめんのか…しゃーねえな…おいスバル、布団はいらねーぞ」

「え？なんで？」

「リアルウェーブのベッドがひとつだけある」

「あ、そうなんだ。わかった」

「じゃあ寝よ スバルくん」

「寝よつか、カイくん」

「「はあ……」」

5分後…

スバル・ミソラ側ベッド

「ねえミソラちゃん」

「なに？」

「抱きつくのはやめてよ……」

「やーだ」

「いや、寝づらいから……」

「すーすー……」

「寝るのはやっ……！はああきらめるか……」

カイ・ユメカ側ベッド

「なあユメカ、もうちょい離れてくれよ」

「いいじゃない」

「よくね…って寝てるし！はぁ…俺も寝るか…」

「すーすー…」

しかし、この夜カイとユメカはなかなか寝つけなかったらしい…

長い夜（後書き）

ドリル（前書き）

久しぶりッス

修学旅行消しちいました（泣）

すいませんッス…

ドリル

「起きてよくカイくん」

「スバルくん遅刻するよ」

「ん……はあ……寝不足だぜえ……」

「眠い」

「ほらほら、朝ごはん食べて学校行かなきゃ！」

「ああ……」

「うん」

「
「
「
「
いただきます。
「
「
「
「

（おい、スバル。どーすんだ？お前）

（何が？）

（ウォーロックが、スバルはドリルに殺されるっていったぞ）

「ドリル……？……あああああああつ！！！！！！！！！！」

「「「!?!」」」

「ど、どうしたの？スバルくん」

「ごめん。僕、先に行く!!」

「えっ、ええ!?!」

「ロック、電波変換するよ!」

『嫌だね』

「もう1度だけ言うよ。電波変換だ。」

『わ、わかった』

（（スバル（くん）怖っ!!）（）（）

「トランスコード!!」

「あゝあ、行っちゃったなあ。」

「私も行くね!行ってきます、お母さん。トランスコード!」

「あらあら。気をつけるのよー」

「しゃーねー!行くぜ」

『イエス、マスター』

「私達も行くよ」

『オッケー』

「「トランスコード!」」

「行ってきます。お母さん」

「行ってくるぜ。母さん」

「いつてらっしゃい。それにしても…あの二人も変身できるのねー
…」

4人は忘れていた…ドリルの存在を!!

ドリル（後書き）

変な終わり方っすね（笑）

コメよろっす

二体の電波体

「一応セーフだけど…」

「全く…私を置いていかないでよ！」

「あ、ごめん。ミソラちゃん」

「スバルくんのバカ！」

「まったく…いきなり行くなよな」

「そっだよ、スバルくん」

「力、カイくんにユメカちゃん！？早くない？」

「ああ電波変換で来たからな」

「そっといえば、出来るっていったね。どんなウィザードなの？カイくんのウィザードは」

「ああ、ゼウスってんだ。」

『はじめまして、ゼウスと申します』

『あ！？お前、ゼウスじゃねーか！』

『え！？あ、ウォーロックじゃないですか！』

『ちよつとちよつと私を忘れてるわよ!』

『おお!!アテナじゃねーか!!』

『ポロロン お久しぶりね』

「ちよつと、ロック。知り合い?」

『ああ、俺らがFM星にいたときの仲間だ。二人とも俺と気があつてな。仲が良かったんだ』

『ポロロン 二人とも強くて、ロックがコーヴァスヴァルゴにやられてたときは、いつも助けてくれたわ』

『余計なこというんじゃないねー!』

「あはは…」

(なんでこんな礼儀正しいゼウスがロックと気が合うんだろ?)

「俺は電波変換でゼウス・グレイヴになる」

「私はアテナ・ヴィーナスになるよ」

「へえ」

その時…

ガラガラガラン!!

「い、委員長!？」

「見つけたわよ!!」

すっかり忘れていたスバルたちだった・・・

二体の電波体（後書き）

ども、なんか、変なんですよねえ…

コメントお願いします!!

ドリルの怒り、カイの言葉

「さあて、いろいろ聞きたいことがあってね…」

（まずいぞ、相当お怒りのようだ…）

「まず、今日はなんで私達を置いて、先に行っただのかしら？」

「そ、それは…」

「俺が頼んだんだよ。」

「カ、カイくん!？」

「まだ色々わかんねーことばっかだからな。早く来て、このことをもっと教えてほしいって頼んだんだよ。」

「そ、そうなの?じゃ、じゃあしょうがないわね」

（ありがとう!カイくん!）

「じゃあ次に、昨日のことよ!なぜミソラちゃんがスバルくんに告白してるの!」

「そ、そういわれても…」

「好きだからだよ」

「ミ、ミソラちゃん…」

「なあ委員長、お前さあスバルのこと好きなんだろう?」

「な!!そ、そんなわけないじゃない!!」

「お前がスバルを好きでも、それでもスバルはミソラちゃんを選んだんだ。それは仕方がないことだろう。」

「だ、だから!私はスバルくんのことなんて…」

「本当に好きなやつなら、そいつが幸せになれば、それでいい。そいつの幸せは自分の幸せ。邪魔なんかするもんじゃなく、むしろ応援するべきだ。違うか?」

…シーン…

(…カイくんは、すごい…)

(すごいなあ…スバルくんもあれくらい、言ってくれなきゃ!)

(さすがカイくん!やっぱりカッコイイ!)

「そのとおりね…私の負けだわ…」

「でも、ルナちゃん。恋はライバルがいたほうが楽しいんだよ!」

「へっ、スバルはモテモテだなあ。うらやましいぜ、はっはっは」

「「カイくん!!」」

「わっ！な、なんでユメカまで怒るんだよ！？」

「もう！知らない！」

ガラガラガラ

「席につけー。授業だぞー」

「ありがとう、カイくん」

「気にすんなよ、スバル。俺たちやあ友達だろ？」

「うん！そうだね！」

「じゃあ礼の代わりに…今日の放課後、俺と闘ってくれ」

「え！？いきなり、今日！？」

『いいじゃねーか！腕がなるぜ！』

『私もウォーロックがどこまで強くなったのか、知りたいです。』

「…うん。わかったよ！勝負しよう！」

「そうこなくっちゃな！！」

「やるからには負けないよ！」

「大口叩くのは、俺に勝ってからにしな！」

『そのセリフ、そっくりそのまま返してやるぜ!』

「スバルさんとカイくんかあゝ楽しみだね! ユメカちゃん!」

「そうだね!」

さて、スバルとカイの勝負はどうなるのか!

ドリルの怒り、カイの言葉（後書き）

変な感じですね。

感想待ってます

スバルVSカイ

…放課後…

「さあて、行くぜ！スバル！」

「勝負だ！カイくん！」

「「トランスコード！」」

「S・Sロックマン！」

「ゼウス・グレイヴ！」

「いくよ！バトルカード、キャノン！」

「…なんだ、その程度か？」

カイにキャノンが当たり、煙が起こる

『へっ！直撃だぜ…んな！？』

「む、無傷！？」

カイは何事もなかったかのように立っていた

「そんな程度なのか？違うよなあ…」

「くっ！バトルカードガトリング…！」

今度はすべて片手ではじかれた。

「そ、そんな！」

「今度はこつちからいくぜ！ゼウス・W・ブレード！」

カイは両手に銃のようなものをもった

「くっ！すべてよけられない」

「まだまだあ！ビッグ・バン・クラッシュ！」

カイは片手を前に出し、強大なエネルギー波を放った

「くそっ、なんてパワーだ…ぐあああああ！」

スバルは止めきれず、モロにくらってしまった

「はああ…ロック、ノイズチェンジだ」

『ああいけるぜ』

「ノイズチェンジ！オックス！」

ロックマンはオックスノイズになった

「第二ラウンド開始だ！オックスタックル！」

「ぐおっ！へへへ…いいパワーじゃあねえか！」

（まさか、オックスタックルを正面から受け止めるなんて…）

「はあああああ…」

カイは受け止めたまま手を前で重ねた

『なんだ？何をしてやがる…』

「ファイナル…」

「ま、まずいつ！」

『や、やべえっ！』

「グレイヴ・キャノン！…！」

「『ぐあああああ…』」

「ま、まさかこんなに強いなんて…」

「はああはああ…スバル、降参か？」

「そんなはずはないさ…いくよ、ロック！」

『準備OKだ！』

「おおおおお…ファイナライズ！ブラック・エース！」

ロックマンはブラック・エースとなった

「ほお……」

『マスター、この数値は少々危険かと……』

「わかってるさ……俺も少し本気をだそう……」

「いくよカイくん、決着をつけよう!!」

スバルVSカイ（後書き）

バトル下手ですね

アドバイスお願いします！！

ファイナライズ！

「バトルカード！ワイドウェーブXバルカンシードXシュリシュリケンX！」

「ちっ！フィールド…オープン…！」

カイはエネルギーを球状にして、バリアにしてロックマンの攻撃を防いだ

「まだまだ！NFB！アトミック・ブレイザー…！」

「くっ…防ぎきれねえか…ならば！ファイナル・グレイヴ・キャノン！」

A・ブレイザーと、F・グレイヴ・キャノンがぶつかり合い、大きな衝撃波が起こる

「とどめだ！ブラック・エンド…！」

「そうはいくか！ゼウス！ファイナライズだ！」

「了解しました、準備は出来ています。」

「ファ、ファイナライズだって…？」

「見やがれ、スバル！ファイナライズ！レッド・ジョーカー！」

カイはレッド・ジョーカーになった

「な、なんでカイくんがファイナライズを！？」

『んなこたあどうでもいいぜ！スバル！』

「わ、わかった！FNF B！B・E・ギャラクシー！」

「うおおおお！レッド・メテオ…イレイザー！！」

R・M・イレイザーと、B・E・ギャラクシーがぶつかった衝撃で、
クリムゾンが無数に発生する。
それほどの威力だったということだ。

「はあはあ…スバル」

「な、なんだい？カイくん」

「ひ、引き分けにしないか？」

「そ、そうだね…」

こうしてスバルVSカイは引き分けという結果になった

『強くなりましたね。ウォーロック』

『へっ！おめえもさすがにつええな！ゼウス』

『なにを…マスターのおかげです』

『よくいうぜー』

「スバルく〜ん」

「あ、ミソラちゃん」

「カイく〜ん」

「ユメカが」

喋りながらスバル、カイは電波変換をとく

「すっごくかつこよかったよ！スバルくん！」

「ありがとう。でも…カイくんがあんなに強いなんて…」

『引き分けだから、互角じゃねーか！』

（マスター、引き分けでよかったのですか？）

（そうだよ、カイくんなんで本気ださないの？）

（体が痛くなるしよー、相手は敵じゃねーし…）

（なるほど…それもそうですね）

（ま、いつか）

「強いなスバル！さすが世界のヒーローだな！」

「カイくんこそ！すっごくつよかったよ！」

二人は握手をした

二人の絆がさらに強まったバトルだった

「貴様のデータのデータは手に入れた…待っている、荒瀬カイよ…すぐに貴様の首をとってやろう…ふふふ…」

不敵な笑みを浮かべるこの男は何者なのか…

謎の男（前書き）

だいぶひさしぶりです

謎の男

次の日

「おつはよースーバールーくん!」

「んゝああ…おはよ…」

「カイくんそろそろおきよーよ」

「んっ…はあゝおはよー…」

「ご飯だよー」

「ああ…飯くうか」

「そうだね…」

「いただきまーす」

「はい、どうぞ」

「二人はくったのか?」

「当然だよー」

「早起きだから」

「うらやましいよ…」

…数分後…

「「「ごちそうさま」」

「はい、お粗末様」

「じゃあいくよ」

「いつてらっしゃい。気をつけるのよ」

「「「いつてきまーす」」」

「はあ、今日も勉強かよ…」

「あれ？カイくん勉強はできないの？」

ミソラが若干二やけながらいった

「うーん…自分ではまあまあだと思うんだが…」

「ちなみに前の学校ではどれくらい？」

今度はスバルが聞いた

「まあ200人くらいいて、良くて1、2番悪けりや5、6番くらいかな…」

「「はあ！？」」

「カイくんは頭いいからね」

「はぁうらやましい…」

「スバルは？」

「普通かな…」

「普通かーいいんじゃない？な！？」

どこからか矢のようなものがとんできた

「ふつよくきがついたな」

「な！？お前はカルロ！？し、死んだはずじゃ…」

「ふざけるな！私がそう簡単に死んでたまるか！」

「くそっ！電波変…」

「アレス・ブレイド！」

「「「！？」」」

「シヨ、シヨウ！？」

「おう！久しぶり！」

いきなり現れた、シヨウという少年いったいなにか…

親友との再会

「シヨウ！？なんでお前がここに！？」

「詳しい話は後だ！まずはこいつを！」

「チツ！有賀シヨウか…」

「フン！5対1だぜ？どうするよカルロ！」

「なんだと？5人くらいで私が倒せるか！」

「そこまでだカルロ」

どこからか声がした

「「「「「！？」」「」「」」

「お前に勝ち目はない。今はひくぞ」

「くっ…分かりました…グラン様」

「久しぶりだな、荒瀬、音村、有賀…そして、そいつがロックマン…
…星河スバルか…」

グランと呼ばれた謎の電波体は、カイたちを見て、呟いた

「グラン…やはりお前も生きて…」

「当然だ。…また会おう、荒瀬」

グランとカルロは消えていった

「ふう〜危なかったあ…」

「シヨウ！なんでお前がここにいるんだ！」

「ん？さあ〜ね後でのお楽しみさ。んじゃ！」

シヨウは電波変換して消えた

「ったく…なんだってんだよ…」

「ああっ！…！」

スバルが叫んだ

「ど、どうしたの？スバルくん？」

「学校忘れてた！遅刻まであと1分しかない！」

「…」「あっ！…！」

「急げ　…！」

…学校…

「はあはあ…間に合った…」

「よ、良かったぜ…」

「もうだめかと思ったよ…」

「ギリギリセーフね…」

「スーパールーくん!？」

「ひっ!委員長!？」

「なんで…」

ガラガラガラ

「席につけー」

(ホッ)

(全く…許さないんだから!)

「今日は転校生を紹介するぞー。入ってこーい」

ガラガラガラ

「有賀シヨウです。よろしく」

「んな!？シヨウ!？」

新たなクラスメイトが1人加わった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2163s/>

流星のロックマン ～あの後英雄は...～

2011年11月3日11時22分発行